

(最終講義)

師友にめぐまれて——印度学・仏教学・浄土学の五十年——

本庄良文

はじめに—資料の説明と全体の流れ—

失礼します。学部長の曾和義宏先生からご紹介頂きましたが、私は到底お言葉通りの者ではございませんので、仰っていたいただいたような人になれるようにこれから頑張ろうと思った次第です。講義の題名が、何十冊もの著作をお持ちの大家の最終講義みたいになって恐縮です。お手元の資料に基づいて、お話をさせて頂きます。ただ、講義というよりも、懐古話のようなものになろうかと思えます。せめて反面教師としてのご参考にでもなればと思います。

年度末ということもあって、この話の準備のために特別に時間を割くことができませんでした。以下、言い訳のため、また自分の記録のために順不同に申しておきますと、本年度、特にその後半は、私にとって最終年度ということでコロナ対応の上に仕事量が非常に多かった実感があります。卒論担当十名は通常のこととして、博論審査二

名、他に普段の博論指導が五名ほど、佛教大学法然仏教学研究センターから桑門秀我『選擇本願念佛集講義』共訳註の後篇二五〇頁の出版が重なりました。さらにオーブンラーニングセンター(O.L.C.)での動画作成として浄土学担当の最年長者として仏教学部ミニ講座「法然の人格 厳しい法然と『話の分かる』法然」担当 (<https://www.youtube.com/watch?v=c6gRtNcVAp4>) および、センター長として附置機関提供講座「佛教大学法然仏教学研究センターの活動」の担当がありました。また、通信課程の学生さん対象に、仏教における聖典解釈についての講義をしました。大学祭のホームカミングデー(十一月三日)では、定年退職教員として「佛教大学との縁(えにし)」について一時間昔話をしました。昨日は、「法然上人御忌会」三十分間の講話として、「『法然上人頌』の歌詞を味わう」というのもありました。

このように多くの事柄に時間を取られましたので、すでにあちこちでお話ししたり、書いたりしたものの四つをまとめた資料を用意し、配布して頂きました。四つというのは左記のとおりです。それぞれに若干の説明を加えます。

(1) 『俱舎論註ウパーイカー』の研究 『佛教學セミナー』第一〇二号、二〇一五年六月三〇日、一八〜三五頁

大谷大学の仏教学会から、二〇一四年に出した『俱舎論註ウパーイカーの研究 訳註篇』上下について話すようにとのお申し出があり、出版の経緯を申し述べたものです。せっかくの機会だと思い、その訳本のことだけでなく、私の生い立ちから振り返りました。ただし、配布プリントでは若干の内容を加えております。

(2) 「佛教大学附属図書館の浄土教関係資料―先人の負託に応える―」『佛教大学附属図書館報 常照』、二〇一八年、No. 六五、一〇〜一三頁

附属図書館の森智女部長様と沼尻直美課長様とにお世話になって、四十年も昔の図書館のことや、平成十六年度以降、大学院の演習で良忠(二一九九〜二二八七) 述『往生要集義記』を扱って以降の状況、また浄土学関係の木

版刷り資料等について、さらに法然仏教学研究センターでの活動等と図書館とのかかわりを述べたものです。

(3) 「研究室訪問 わたしの学び 本庄良文」『佛大通信』No. 五九七、二〇一五年、八〇九頁

通信教育の事務局から、普段の自分の勉強や勉強方法について取材したいということで、当時すでに浄土学の教員になっていましたが、浄土学だけでなく、若い時分のも含めてお話しし、写真を掲載して頂いたものです。

(4) 「私が二十歳だった頃」『法輪』第二五号、二〇一八年、一三九〜一四二頁

二〇一八年度、朝のお勤めの後にお話しする機会がございまして、その年のテーマの一つが、私が二〇歳あるいは二〇歳だった頃というのがありましたので、それがやはりサンスクリットをやりだした頃にもなるので、ちよつとそこにも載せましたということでもあります。

以上の四つに基づく話を仮に第一部と致します。むろん、それらは全体としては順序立てたうえで体系的に述べたものではありませんので、互いに重なる内容があったり、時間的に前後してしまったりすることもあるでしょう。その点はご容赦ください。

第二部は、浄土学分野の訳本や論文を列挙することによる、研究面の自己紹介になります。私は、今年度まで佛敎大学で十二年を過ごしましたが、最初の四年は印度仏敎を専門とする特別任用教授として、あとの八年は浄土学の正式の教授として在籍していたからです。以下が浄土学関係の仕事です。

(1) 高橋弘次・善裕昭・本庄良文『傍訳選択本願念仏集』四季社、二〇〇二年

(2) 桑門秀我『選擇本願念佛集講義』前篇・後篇 佛敎大学法然仏教学研究センター、二〇二〇年、二〇二二年 (上野忠昭氏との共著)

(3) 良忠『往生要集義記』(八巻のうち第一巻のみ)『浄土宗學研究』他所収。

(4) 法然における諸行往生の可否をめぐる論文リスト

- ① 『選択集』 第四・第十二章における「廃立」の語義 二〇一一年
- ② 『選択集』 第十三章における「不可得生」の経典解釈法 二〇一一年
- ③ 経の文言と宗義―部派佛教から『選択集』へ 二〇一二年
- ④ 法然による諸行往生の「否定」―論点の整理 二〇一二年
- ⑤ 『選択集』 第二章における千中無一説―諸行往生の可否に関連して 二〇一二年
- ⑥ 『選択集』 第六章における特留念仏釈と諸行往生の可否―平雅行説の検討― 二〇一三年
- ⑦ 了慧道光による『選択集』 第十三章「不可得生」の解釈 二〇一四年
- ⑧ 『選択集』 第十二章における随意意・随他意説―諸行往生の可能性に関する善裕昭説の検討― 二〇一四年
- ⑨ 「法然における諸行往生の可否―「ふつとむまれずといふにはあらず」―」 『印度学仏教学研究』 第六八卷 第二号 二〇二〇年

## 第一部

### ① 生い立ち

この第一部の(1)の資料から参ります。(①から⑩まで『俱舎論註ウパーイカー』の研究) 『佛教學セミナー』 第二〇二号参照) 資料の中心テーマは『俱舎論註ウパーイカーの研究』ですが、まず生い立ちについて。先

ほど曾和先生からご紹介頂いたように、昭和二六年に京都府綴喜郡八幡町（現八幡市）という町で生まれました。浄土宗のお寺です。ただこんな場所で申し上げるのも何ですが、若い時、特に思春期ぐらいになりますと、潔癖な考え方が芽生えて参りまして、自分のいるお寺だけではなく、浄土宗の教団の在り方——といっても今から考えると分かった上で、ではなくて漠然とですが、——に対して、肯定的でない印象を持ち始めました。端的にはですね、私はきょうだいが姉だけで男は私ひとりなんですけど、お坊さんになるルールが敷かれている点が何よりも嫌でした。なんでこんなルールに乗らなあかんねんと。いちいち申し上げることは省略しますが、思春期独特の反抗といえますか。

ただ配布資料にも書いたのですが、私は当時、京都学芸大学（現京都教育大学）の付属桃山中学に通ってました。すると毎年その大学から教育実習の学生さん——教生さん——が来られるんです。中学校二年のクラスの特別活動の時間に「将来何になるか」という話になり、順番に当るうちに、私、「お坊さん以外やったら何でもいいです」のように申しました。すると後でですね、その教育実習の人に、メモを渡されたんです。自坊の書類の山を探せば出てくるかもしれないんですが、こんな意味のことが書いてあったように記憶しています。

二五〇〇年も続いて来ている仏教をそのように言うものではありません。

これを今に至るまで覚えているということは、やはりその生意気な自分に対する批判として、チクつと刺さった部分が大きかったんでしょう。また反面、それは自分の客観的な立場を擁護する言葉でもあったわけですから、確かに自分にとってはありがたい言葉だったなと思いつけている次第です。もちろん、なぜ自分がそのようなことを言うようになったかという個人的な事情については、分かってはくさるまいという思いはありました。また仏教の教えそのものはそうかもしれないけれども仏教の教えと日本の仏教界の現況とは一応別個のものですから

「寺は嫌や、浄土宗は嫌や」という気持ちがずっとありまして、二〇歳ぐらいまでずっと、——今もあるかも分かってんですけど——、いや、「今も」言うたらあかん（笑）。これは早速取り消しときます。自分もその一部であり、浄土宗僧侶、浄土学の教員を名乗った以上、責任の一端は免れませんので。

## ② 原始仏教へのあこがれ

そこで高校時代の終わりがら、寺の現状の対極にあると思った原始仏教にたいして、清浄無垢なイメージを大いに膨らませまして、憧れを懐いたわけです。具体的には増谷文雄先生の『仏教百話』（現在は筑摩文庫、当時は新書版）、『阿含經典』（筑摩書房）あるいは中村元先生の『ゴータマ・ブツダ』（法蔵館）を、「ええなあ」と思いつながり読んでおりました。（今から思えば『阿含經典』以外の二冊は亡父が買ったものでした。どんなつもりで買ったのか聞いてみたい気がします。知恩院山内の華頂中学、高校で仏教を担当していたので単なる教材研究のためだったのかもしれない。）さらには其中堂へ行って長井真琴先生の『獨習巴利語文法』（山喜房）を買って父親に叱られたりしていました。

ただもともと大学で仏教学をやるとすれば、漢文ばかり読むようなイメージだったんです。比叡山に籠って漢文ばかり読んでいるみたいだね。そういうイメージだったので、そうなんやろなあと思っておりましたが、入ってからはそのイメージは見事に裏切られました。ただし、現役なら一九七〇年に入学するはずが、中途半端な受験勉強しかしませんでしたので一点差で落ちました。それで一年浪人して、一九七一年の四月に京都大学文学部に入りました。

その時はまだ大学がずいぶん荒れておりまして、赤、黒、青、白など色とりどりのヘルメットをかぶった学生が



集会を開いたりデモをしたりしていました。学費値上げ（私たちの年代まで一月千円で四年で四万八千円でしたが次の学年から三倍に値上げになり、それ以来、学費が上がり続けているわけです）に反対したり、沖縄返還について「返還せよ」（共産党系）、「奪還せよ」（革命的共産主義者同盟中核派）、「返還粉碎」（社会主義青年同盟解放派）、「日本帝国主義による沖縄のアジア侵略の前線基地化を阻止せよ」（共産主義者同盟—ブント系）と主張したり、といった状況でした。それで、実は私も恥ずかしながらちょっとヘルメットをかぶっていたことがあって、でも、それ以上話すのはやめときます。それらの人々の集団の中でも私は、最も末端中の末端の存在でして、語るほどのことは全くございませんので。実は資料づくりのとき二ページ目になるべきところにそういうことを書き始めましたら、暗くなってきまして、これは心の中で納めておこうと、ちょうど頁数の上でもこれでおさまるので書かないままにさせて頂きました。

なお、今の時期のことについては、「私が二十歳だった頃」（『法輪』第二五号、佛敎大学宗教部）で少しだけ書きました。一九七〇年から七二年ぐらいにかけて、私の性格が暗い時代がございました。一つのエピソードを申します。地元「学生会」という大学生の集まりがありました。十人余りの人数だったでしょうか。田舎ということ。当時大学に進学する人は少数派でした。全体としても確か男子が四人に一人、女子が六人に一人ぐらいで、学年全体では五人に一人ぐらいしかいなかったんです（一九七〇年、男子二七・三パーセント、女子短大合わせて一七・七％。一九七一年、男子同三〇・三パーセント、女子同二〇、八％）。

学生会では夏休み中に「夏季学校」なるものを小中学生相手に開いたりしていました。私、その団体の書記を勤めていて「学生会だより」みたいなものを発行する係でした。ある日たまたま私より一学年下の人へ電話した時です。昔は固定電話で家へかけるわけです。ご本人より前にご家族が出られます。私の声は、くぐもった「ううう

う」なんていう犬の唸り声みたいな声で（笑）、私が話し終わると電話の向こうで家の人がくすくす笑いしながらご本人に繋がはるんです。「こんな声で電話かかってきたで」みたいに。いまだに思い出すんですけど、普段からものすごい暗い声で喋ってたみたいです。

③ サンスクリット学習（一九七二年）

では次に一九七二年です。今回の題目を「インド学仏教学浄土学の五〇年」と大層なタイトルにしましたが、どう五十年かというところ、ちょうど一九七二年の四月にはじめてサンスクリット初級文法をやりだしたからなんです。

その時の先生は大地原豊（おおぢはら・ゆたか、一九二三～一九九一）という方でした。あまり世間では知られてないですけど、それこそすごいとしか言いようのない先生で、そうですね、我々にはあんまり丁寧には教えて下さらなかったんですね。イメージ的には、一から順序を追って十までいべきところを、途中を飛ばして「一三五七八十」のような。一年後輩が言っていました、「あれはあれでしょ」とか言われて、「あれはあれでしょってなにがやねん」とこっちはなるという。自分の頭の回転の方が、早くて口がついていかない。そんなイメージやったんかなと思います。この方の師匠がフランスのルイ・ルヌー（Louis Renou, 一八九六―一九六六）という人で、此の方が大地原先生のことを「ムシューオオジハラは、サンスクリットの天才だ」とおっしゃったんですね。そのルイ・ルヌー自身が天才だったので、その天才が天才だと言われた方です。（先生も先生の先生も、それぞれ第二次と、第一次世界大戦のために学業の中断を余儀なくされているようです。）

授業にはなかなかついていけなかったです。父親が大学時代に作った（というか友達に写さしてもらった）練習問題のノートのおかげで前半までは何とかついていけましたが、後半がさっぱりだめでした。おまけに先ほど申し



ましたような、学生運動が盛んなときやったので、ストライキばかりで授業が少なかったんです。何回か授業があったと思うたら、次はストライキ、またあったと思うたら次はまたストライキという風で、ほとんど授業がまともにできなかつたんです。そこで十二月の冬休みの時期だったかに先生がご自身の研究室（新館五階）に受講生三人（普段の授業は当時の「新館」南西角の小さな第九演習室で最初は二十人ぐらいいるが夏休みを過ぎると毎年少数になる）を呼んで、後半の二十課ほどを短期間（一週間ぐらい？）で集中講義されて、無理やり終わりにされてしまいました。おまけに最後の時間に出されたワインに中って、ひどい下痢に悩まされるという落ちがついたんです。その時、われわれは「勉強が出来ない」という烙印を押されていたみたいです。しかしこちらはちゃんと教えてもらってなかつたと思って恨めしく感じていました。ただそのことがとんでもない勘違いやったということを知ったのは、ここ十年ぐらいのことなんです。

大地原先生には、学生時代（旧制高校から大学にかけて）に無二の親友がありました。その友人は戦争で亡くなってるんです。一九六七年、その友人の日記が関係者の尽力で出版されました。林尹夫（はやし・ただお）『わがいのち月明に燃ゆ』（筑摩書房）といっています。終戦後二十二年のことで、まだまだ戦争体験者が多かつたので大変な反響やったそうです（新版・林尹夫著、斉藤利彦編集『戦没学徒 林尹夫日記「完全版」——わがいのち月明に燃ゆ——』吉田山叢書、二〇二〇年）。

先生はその本にあとがきを書いておられます。その中にご自身の語学の勉強の様子を書いてはるんですよ。例えばラテン語。次の年度にラテン語を学習するとなつたら、春休みのうちに全部予習して、練習問題も解いて授業に臨まれたといっています。（ただし、気の毒にもその年度に兵役に就くことになって折角の準備が「無駄」になつてしまふんです。）ということとは、大地原先生の目からしたら、「こいつら二回生のこの時期に、サンスクリットをやる

ってわかってるんやったら、春休みのうちに練習問題に至るまで全部やっとかんかい。気構えがなつとらん。話にならん」ですわ。今から思えば申し訳ないことしたなと思うてます。私にしても、授業前にリラックスして周囲と世間話しているような大学院生諸君を見て「気構えが……」みたいなことを思わんでもないです。「話にならん」と。私らは出来の悪い自分だと分かっていた（最初は友達の下宿に押しかけて夜もろくに寝ずに予習しても授業の半分しか読みこなせませんでした）ので、初級文法を「終えて」、一九七三年、学部三回生のとき、実際にサンスクリットの原典を読むようになると、授業の始まる直前まで先輩方をつかまえて「すみません、ここどう読むんですか。」「これ何ですか」いうて必死で聞いてましたから。しかしまあ「天才」と言われる方々が普段どんな気構えでどんな準備をしておられたかを知れば、授業の直前にどうこうなんて言うてる場合やないことが知れるっちゃうもんです。

### ③ 学部進学（一九七三年）

当時の陣容は、仏教学梶山雄一教授、印度哲学服部正明教授、井狩彌介助手（前期は山上證道助手）、人文科学研究所に荒牧典俊助手、梵文学に大地原教授でした。後期に小林信彦助教授がトロントから帰ってこられて、この先生に改めてサンスクリットを習って、初めて少しわかるようになってきたということでもあります。サンスクリット学習にはポイントが二つあるんです。第一には、動詞に「語根」（ルート）というものが想定されていて、そこから多種多様な単語が派生するとされていますので、まず語根をしっかりと学習して派生した言葉の意味を有機的に繋げながら記憶するということが必要なんです。第二は合成語の種類と用法をしっかりとマスターするということが必要になります。私は情けないことにそのいずれも出来てなかったんです。それを小林先生が繰り返し教えてくださった

おかげで、ちよつとずつサンスクリットがわかるようになってきたということでもあります。

④ 修士課程進学、論文での「失敗」（一九七五—六年）

それから、資料（3）の「私の学び」で書いたことなんですけども、修士一回生のときに、自分で言うのも何ですが、人生で一番集中して勉強しました。京大の研究室では、梵文学・印度哲学・仏教学の三つの専攻が一体になっていて「印度学」と自称してまして、三回生から博士課程までが同じ研究室にいました。どの専攻も、サンスクリット学習をベースにしてましたんで、三つの学科の学生すべてが梵文学の詩や戯曲の講読・演習の授業を受けました。なんでその方法が大切かというところ、西洋哲学もそうやと聞きますが、日常語を使って哲学をやるわけなんです。哲学を勉強するにあたって、語感というんですかね、語感からわからんといかんと、そういうことで文学作品を読んでたわけでもあります。これも大地原先生から聞いたことです。自分にとってとても印象的な例（パラマールタール眞諦、勝義）についてはよそ（資料（1））で書きましたんで、見といて頂けたらと思います。

さて修士課程に進んだ当時、荒牧典俊先生（いちおう唯識の専門家ということになっていますが、そんな狭い先生ではありません。インド、中国、日本をカバーする方です。）が京大教養部におられて、ジャイナ教と原始仏教の資料を比較して新たな視点を持ち込むという方法で研究を進めておられました。ジャイナ教は、仏教のやや先輩になる「兄弟宗教」です。一学年下の榎本文雄さんとともに影響を受けまして、その方向で「初期仏教徒の〈正統〉バラモン教批判」のようなタイトルの修士論文を纏めました。一九七六年のことです。しかしこれは自分にとっては悪夢のような結果になりました。論文試問では二人の先生が擁護派、同じく二人の先生が批判派、一人の先生が中間派となりまして、形の上では五分五分だったんですが、特に大地原先生が、「君は誰に向かって論文を書

いてるんや。日本人の論文しか引用してへんやないか。世界に向かって書け」って言われたのが応えました。そのため一九七七年の一年間ほどは、目標を失って茫然自失みたいな状態にありました。それを救ってくれたのが、あるチベット語訳資料の研究なんです。

⑤ 櫻部建先生と『俱舎論』註『ウパーイカー』

ちよつと年代が遡りますが、一九七三年秋に大谷大学の櫻部建（さくらべ・はじめ）という先生が、梶山雄一先生の招きで、『俱舎論』第五章随眠品を読みに来てくださいました。その方が普段も論文でもこう言っておられた。——『俱舎論』にはいろんな注釈書があります。基本的には『俱舎論』のこの言葉はこう、この質問はこの意味と——というように、語句や文章について注釈していくのが普通です。けれどもひとつ、特殊な注釈があるんですよ。『俱舎論』のなかには、論争する時とかに、《おまえの言うことは正しくない、なんでかいうとお釈迦さんがこう仰ってるから》《いやいや、お釈迦さんがこう仰ってるからおまえの言うてることこそおかしいぞ。》みたいにしてお釈迦さんの説かれた、いわゆる阿含経典を引用することで相手をやっつけるとか、あるいは自分の教義を構築していくということがあります。そこで、『俱舎論』での経典の引用のこの部分は実はこういうお経の一部ですよ、という形で、ひたすらお経ばかりを引用する注釈書がありますよ。——

ところが櫻部先生が周囲の方に、「これは非常に興味深い資料なので、チベット訳しか残ってないけど、やったらどうですか」と勧めますと、みな尻込みしたらしいです。というのは、「やり終えるのには一生かかるから」と付け加えられたんで。私はその資料のことを一九七七年の目標を失っていた時期に思い出しまして、「他の人がやらへんのなら、自分がやろうかな」となったわけでありませう。資料の比定や翻訳を始めたのが一九七八年ごろ、最

最終的に翻訳篇が出版されたのが二〇一四年。三十数年かけてやっと全部の——と言ってもかなり間違ひも見つかりますし、若干意味不明で訳することができんかった部分もあるんですけど——一応トータルに、訳を作ることができたということでありませう。

## ⑥ 佛教大学非常勤講師

さて話がまた前後しますが、配布資料に「一九七八年京大助手」って書いてありますけども、助手（今の助教）にならして頂いて、二年で辞めまして、佛教大学の非常勤講師にしていたんですけれども、それが佛教大学との最初の縁になります。どうしてそうなったかの話は、昨年十一月三日の学園祭のときに、「私と佛教大学との縁」という形で、お話ししたんです。なぜか故藤堂恭俊先生（後に大本山増上寺御法主台下）が、「本庄を佛教大学の非常勤講師に迎えたい」と主任教授の梶山雄一先生を通じて言うてくれはったら幸いです。藤堂先生は、器の大きい方だったんやろなあと思います。当時、外部の大学出身の若手を仏教学科の非常勤に迎えるという事はほぼ皆無でした。人材は足りてるわけですから。実際、佛教大学の当時の若手の中で、その話を聞きつけて反感を抱いた方もあったようにお聞きしました。ある方が、「本庄さんのことを呼び捨てにしてる人がいますよ」というて実名入りで知らせて下さったこともありまして。梶山先生からも、非常勤講師にして頂いてから「発言に気をつけるように」とのお言葉もありました。

佛教大学との縁はその時にお話ししましたので（文字化されていらないので）省略もしにくいんですけど、ここではとりあえず省略させていただきます。

先ほど、『俱舎論註ウパーイカー』の全体の翻訳が出来上がったところまで申しましたが、研究を始めてしばら



くしたころ、一九八四年に『ウパーイカー』の資料をまとめた表を自費で出したということでもあります。それもちよつと危機感に駆られて出したような側面がございます。

⑦ 小林信彦先生と「クシャーナ研究会」

資料に手書きで記してあるんですけど、「一九七三年秋」云々の梵文学の小林信彦先生ですね、小林先生について書いてあるところですけども、左京区東一条の日本イタリア会館（日伊会館）を中心会場に「クシャーナ研究会」なるものを主宰されました。何年から何年というのはちゃんと調べたらわかりますが、ここでは思い出せないです。私が三十五歳ぐらいだったかな。この研究会では、龍谷大学・大谷大学・佛教大学・大阪大学・京都大学・種智院大学・高野山大学といった京都近辺で印度哲学や仏教学の講座のある大学の若手を集めて月に二回発表をする、ということが行われていました。発表者には資料を準備させて、小林先生が御自ら冊子に印刷して、事前に配布しておられたと思います。そしてたもう京都近辺の若手がみなお互い知り合いですわ。例えば今、龍谷大学の学長は入澤崇先生ですが、私、入澤先生と知り合いですね。普通そんな偉い人と知り合いになんてなれませんよ、学長と。このときの研究会で発表され、また私も発表していましたから知ってくれてはるし、こっちも知ってるんですよ。この研究会ものすごくよかったですよ。おかげで今日の話のタイトル通り、とても師友に恵まれました。（櫻部建先生がこの研究会のことを力をこめて「ほんとにいい」と、絶賛してられたのを思い出します。櫻部先生は、本当に研究の在り方というものをよくよくご存じの方でした。）またこの（最終講義の）会場におられる並川先生を始め、たくさんの方がこの研究会に関わっておられたということでもあります。

その時に私、アシュヴァゴーシャ (Asvaghosa: 馬鳴) という古代インドの仏教詩人が、少し専門的になります



が、サウトランティカ学派（経部）ではないか、という発表をしたりしていました。ちょうど今、松田和信先生が盛んに解読を進めて下さっている資料（Tridandamala）に関連するわけであります。

それですね、二十九歳の時に佛教大学へ非常勤講師に呼んでいただきましたね、そしたら厚かましくもわたし非常勤なのに、旧九号館四・五階とかですかね、仏教学科の先生とか学生さんとか、仏教学科の資料室に来られるんですね。そこへ私、勝手に入るんですね。よう入ったなあ。勝手に非常勤が入って行ってですよ、皆様と仲良くさせてもらいました。またその方たちが先程のクシャーナ研究会とつながって、知り合いだらけになったということです。私、神戸女子大学に就職したあと佛教大学の非常勤を一度やめていて、先ほど仰っていたように、二〇一四年に特任教授にならせていただきましたけど、その時に存じ上げない先生がほぼゼロでした。そもそもの始めが藤堂恭俊先生のお蔭で佛教大学の非常勤講師にいただいたことだったわけです。

#### ⑧ 神戸女子大学

さて、神戸女子大学でのことを少しだけ申しますと、一九八九年の九月に須磨区にある神戸女子大学の専任講師に雇うていただきまして、そこで何を教えたかというところ、道德教育と西洋哲学とそれから東洋思想。皆さん、これお聞きになって、「よう教えるなあ厚かましい」かもしれない。（女子大の学生にも、「哲学は教えるものではないでしょ。哲学は哲学するものでしょ」、そんな事いう学生がいたりね。カントの *philosophieren* 知ってるすごい学生がおるな思うてね。）恥ずかしいいうたら恥ずかしいんですけど。ただ高校と一緒にするなと言われるかもしれませんが、高校でも同じちゃうんですか。昔やったら社会科の教免取りますね。自分がやってること卒業論文までやからそんな大して知ってるはずないやないですか。今から考えたらね。なんで世界史教えたり日本史教えたり、

さも先史時代から現代まで知ってるかのように、喋れるかいうたら、それは教材研究ですよ。教材研究したらなるとかなるんです。せやから私もそうしましてん。それだけのことですわ。最後やからちよつと愚痴ってみようかと思えますけど、自分の専門やないからよう教えんとかいわはる先生あるやないですか。それはね、佛敎大学みたいなたくさん専門家のいやはるところやから言えるのであって、小規模大学では、大概の場合は、中国のことやってる人誰？いうたら一人だけです。哲学やってんの誰となったら、一人だけです。（私の場合、三四人ありましたけど。）せやからその一人が世界中やらなあかんのです。自分の専門がなんやからいうて、それできませんみたいなこと、給料もろてるもんが言うこととちやいます。だいぶ敵できたな（笑）。ということで、神戸女子大学めでたく就職いたしました、大変楽しい時間を過ごさせていただきました。ただね、一九九五年の一月一七日の阪神大震災だけはもうちよつときつい経験でありました。自分は自宅が京都府で被災してる訳やないですが、被災地に通っているので被災してないでもないみたいだね、そういう身柄でしたので。（この体験については佛敎大学宗敎部『法輪』令和三年度の号に「ひとり相手のひとりボランティア―須磨浦通り三丁目ものがたり」という題名で、朝のお勤めのときの講話を載せて頂いております。）ということで、全体として非常によくしていただいたなと思っております。というのは、大学には研究紀要ってあるでしょ。女子大では文学部と教育学科のふたつの紀要に、先ほど申しました『俱舎論註ウパーイカー』の訳を、四百字詰め原稿用紙換算で五〇枚ずつ出してそこそ溜まったということが大きかったです。

⑨ 知恩院浄土宗学研究所属託研究員から研究副主任へ

そうしてる間に一九九四年度、知恩院の浄土宗学研究所属託研究員にさせていただきました。浄土学の論文も何

も書いてなかったんですが善裕昭先生のご推薦があったように伺いました。ありがたかったです。

だいぶ経ってからですけど、そこで研究副主任をやらせていただいた時に、法然上人八〇〇年遠忌が巡り来まして、その時に『法然上人のお言葉―元祖大師御法語―』というのを、現代語訳する委員会に所属しました。訳することで読みが深まり、たいへん勉強になった記憶がございます。（小説家の村上春樹に「翻訳って究極の精読なんですよ」という言葉があるんですよ。）その本、持ってくるはずだったんですけど、うっかりしました。各頁の上に原文、下に現代語訳、章ごとに註、本の最後の方に索引、さらには各章が『昭和新修法然上人全集』（平楽寺書店）のどこに当るかを示した表、こういうので出来上がっております。それで、索引の中に頁の数字が太字であるところがあるんですよ。それは何かというと、そこを辿っていただくと、ちゃんと註があつて、それをもし集成したら『ミニ法然上人辞典』になります。実際にそういうファイルを作ってくれはった人（杉山憲哉さん）があつて、わたしファイルあるので、もしよかったら、そのファイルどいつたんやわからへんけど。探したらありますので。ということ、自分らで作ったから言うわけやないですけど、ようできてるんですよ。みんなで頑張つて作ったものだからね。そのときに現代語訳にずいぶん時間がかかったんですけど、特に「一枚起請文」が一番時間かかりました。逆にそれでたくさんの内容がこもっているということを心底実感しました。もちろん全体的に見て訳文には多少の問題はあるかもわかりませんが、常勤の助手さんと研究員が四人でしょ、それに眞柄和人先生と私がチームリーダーみたいなことや、福原隆善研究主任（現百萬遍知恩寺御法主）や布教師会会長上田見宥上人のご指導を賜つて出来たものなので。

⑩ 浄土学の研究論文

さてその訳文作成の過程で、種々議論しているときに、お互いに証拠となる資料を集めるわけです。普通そういった資料の中身は、注に反映されることになっています。しかし、そもそもこの本は、コンパクトな冊子にしないといけないという「しぼり」があったんです。（漢字が多すぎるというお叱りも受けましたが、それも必要あったことなんです。）というのとはもともとこの本は、総本山知恩院布教師会から知恩院浄土宗学研究所への依頼に基づいて作ったもので、布教師さんが簡単に持ち運びできるように、携帯用にしてほしいという要望があったからです。ですから本文の用紙も、同朋舎の担当の濱本直哉さんのアドバイスで辞典用の強くて薄いものにしたんです。それで訳注は、三行ぐらいまでに収めることにしていました。そうするとせっかくの資料や議論の内容が、消えてしまうんです。そこで今日の配布資料には載せてませんが、現代語訳の担当者がそういった議論を形にして残すことにしたんです。『法然上人のお言葉―元祖大師御法語』解釈上の諸問題」と題して『八百年遠忌記念法然上人研究論文集』（知恩院浄土宗学研究所、二〇一一年）の中に収めてあります。この論文集は二五〇部ぐらいしか出版できてなかったと思います。いずれにせよ私はこの現代語訳を行う過程で、とても視界が開ける思いをしました。世間でも「使用前使用後」ってあるでしょ、自分の中でその「使用前使用後」体験となりました。またその過程で今まで書くことの出来なかった法然関係の論文が書けるようにもなってきたわけでありました。

私が元タインド学しかやっていなかったのに、どうして浄土学の教員になれたのか、あるいは厚かましくもなっているのか、それは今述べたような状況から論文の数だけは少しずつ増えていったからという点が大きいのです。

⑪ 浄土学事始め その一 — 眞柄宗典輪読会 —

浄土学についてそもそも話から致しますと、配布資料(2)の二ページの上ですね。(すいません、あっち行ったりこっち行ったりで。)一九八〇年代、眞柄和人先生が、知恩院浄土宗学研究所に在籍しておられたとき、先生は浄土宗教学院から研究費の支給を受けて、浄土三部経の重要語句について研究するプロジェクトを開始されました。そこで浄土三部経の輪読会を始められたんです。眞柄先生はもともと大正大学で原始仏教を研究しておられた方です。次いで大学院修士課程を修了され、博士課程は佛教大学で修められました。私はたまたま学部の中から先ほど来、申ししているように原始仏教(初期仏教)を勉強していて修士課程のとき印度学仏教学会で研究発表もしております(『長老偈・長老尼偈』に関する語学的研究)。それを眞柄先生がご覧になっていて、「浄土宗に原始仏教をやっている人がいるな」とインプットして下さった。これは想像ですが、「本庄はあのままでは印度仏教だけで終わりがねない。それはいかん」と、私を誘ってくださったのではないのでしょうか。そういう私は、先ほど申しあげたように、そもそも「浄土宗」、というよりもお寺の現状に違和感を感じていたからこそ原始仏教を勉強し出した経緯があるので、そういう雰囲気を感じ取られたのかもしれない。というのは、眞柄先生が後になって、私を前に、「本庄さんって案外お坊さんなんです」と第三者に仰ったことがあるので。

ただ、私も修士課程以降にもなればやや軟化していて、父親も五十歳を超えて衰えてくるし、「年取ってこの先かわいそうやなあ、もうほんならぼちぼち跡継いでやろうか」と。なんじゃこれ、こんなこと公言して。「あいつ全然発心もせずに坊主になりよったんや」ということになると思いますけど。えっと話を元に戻しますと、眞柄先生からお申し出の浄土三部経輪読の参加について、迷いはなかったです。寺の悪口をさんざん言っときながら今さらいいい恰好するわけではないですけど、私もその時にはいちおう浄土宗のお坊さんです。(当時、私の学年までは



少僧都養成講座が三週間二回のみで、——次の学年の方が恨めしそうにしておられるように見えました——三回生だった昭和四十八年に増上寺で第一期を修了し、それ以降、学部四回生と修士課程の都合三年間は講座を受ける余力がなく、博士課程一回生でまた増上寺で第二期を終え、その同じ年度に知恩院で加行を受けました。(浄土宗のお坊さんが浄土三部経を読まんでどないすんねんと自分に言い聞かしたんですよ。それで眞柄先生の輪読会でちょっとずつ読んでいったんですよ。それも勉強になりましたわ。私は高校の時にいい加減に勉強した以外に漢文を全然っていうていいほど読めませんでした。日本にはいい伝統があるでしょ。つまり訓み下し。レ点とか一二点なんかを辿ることで、こう真つすぐ読む文章が、上下しながら日本語になっていくやないですか。そういう方法が我が国に伝わってるおかげで、ちょっとずつながらも漢文も読めるとはよう言わんけれども、親しむことができるようになりました。そうこうしてるうちに、眞柄先生の方からやったか、メンバーの方からやったか忘れちゃいけないけど、「せっかく浄土三部経を月に一回読むようになったのだったら、引き続き浄土宗関係の漢文資料を讀んでいこうやないか」とこうなりました。配布資料第二ページの上から三行目ですか——。

次に讀んだ『往生要集』、現物をここに持って来ました。『浄土宗全書』見開きA4版約一二〇頁を二倍に拡大コピーして、製本してあるんですけど、一九八五年一月三日に読み始めて、一九九二年九月二四日読み終えました。書いてあるんです。七年近くかけて読み終えた計算になります。石田瑞麿先生の訳(平凡社東洋文庫二冊)を脇において、土曜日の午後、八月以外、月に一回集まって、見開き二頁ずつ読んでいきました。その後、順不同ですが、善導『観経疏』、法然『選択本願念仏集』、永観『往生拾因』、伝最澄『末法燈明記』、世親『往生論』、源信『普賢講作法』、隆寛『知恩講私記』、こういったものを読みました。最後は難解で歯が立たなかった良忠『安樂集私記』。



でもね、もともと浄土学の論文なんて書くつもり全くなかったですわ。ただ「浄土宗のお坊さんやから浄土宗のこと知らんとあかん」と、その思いで読んでただけであって、何もこれで一旗揚げようかとか、論文を書こうかとか、全く思っただけです。

## ⑫ 浄土学事始め その二 — 法然上人研究会 —

それから同じ動機ですね、平成三年か四年ごろに佛教大学の岸一英先生、佛教大学出身の永井隆正先生、それに華頂短期大学（当時）の中野正明先生、この三人の方が中心になって法然上人研究会というものが発足しまして、毎月華頂短期大学を会場に輪読会が行われるようになりました。私は、発足当初からではなくて、途中から参加させていただくようになりました。これは知恩院宗学研究所に在籍する前ですね。そこには先程のメンバーですね、善先生とかも当然おられたわけです。

輪読会では何を読んだかというところ、最初は（一）『西方指南抄』、これは親鸞聖人が編集されたか、書写されただけかわかりませんが、法然上人の遺文を集めたものです。そのあとは河内長野市天野山金剛寺所蔵の（二）信瑞編『明義進行集』第二、三巻。落合俊典先生（華頂短期大学、後に国際仏教学大学院大学）が研究会にカラー写真を提供してくださいました。第一巻は法然上人の伝記が収められていたと推測されていますが失われています。第二、第三巻に法然上人のお弟子さんの思想と行動が詳しく記録されていて、非常に資料価値の高いものであります。その次に（三）『醍醐本法然上人伝記』ね。ものすごくいい選択ですね。ちょうど『明義進行集』を読み出す前に、大谷大学文学史研究会の方々が苦心の末、『明義進行集』の素晴らしい索引付きの校訂本、写本の写真も入ったものを作られました（法蔵館、二〇〇一年。編集に携わられた中畠容子先生に研究会で解説をお願いしました）。こ

の本のおかげで随分助かりました。ただね、研究成果を法然上人研究会の雑誌（『法然上人研究』）でちよつとずつ出すはずが、『西方指南抄』もあとちよつとのところで完全には出てなかったり、『明義進集』もお弟子さんの二、三人までは形にしたけど、その後ちよつと止まつてるという状況です。誰が止めたんやいうたら私が止めたんですけどね。これは当座やむを得なかったと思つています。大学を辞めたらちよつとは余裕ができるかと思うので、連載を続けて行けたらと思つております。ただ私がこの先どれだけ生きられるわかりませんので、うまく後輩の若い皆さんに引き継いでもらえたらとも考えております。『醍醐本』については、輪読の時には、私の出席率がやや低調でしたが、資料が手元に揃つていますので、何とか出すようにして頂けたらと思つています。

思うにこういう資料つて世の中にいっぱいあるんやないかなと思ひますね。輪読会やりましたと、それぞれ資料も現代語訳も用意しましたと、ああではないか、こうではないかと議論もしました。さてその成果が本になるかどうかいうたら累々たる屍が目に見えない形で残つてるんやないかなと、身近にも感じるところです。その理由の一つを申しますと、大学、雑務で忙しすぎますわ。専任教員が研究時間を持つてへんもんやから、「これ一緒にやろうやないか」と呼びかけにくい。自分に跳ね返ってきますから。今の大学なんとかならんかなと思ひます。それから十八歳人口がどうこうという問題もあるしね。若くてぴちぴちの研究者の卵を雇うて、金銭的には多少不自由していても時間はなんぼでもあるようにして、研究の場を確保してもらえたら喜んでしてくれはるやろうし、最初は多少喜ばんでもやってるうちにだんだん喜んで《おもしろ》とかなつてくると思ひます、なんとかならんかなあと、どっち向いていうたらええのや。文部科学省？ アメリカ？ 例えばシラバスとかあるでしょう。シラバス作るだけでもすごい時間かかって、しかも年度末の忙しいときに書いて、四月に授業始まるでしょ、「おれこんなこと書いてたんや」とか言うて、これ笑うところかドン引きされるところかわからんような。ほしたらコロナで

しよ。「シラバス通りにでけへんやん」ってなって、事務局曰く、「できないんでしたら、《シラバスとちがうますよ》って学生に知らせてくださいね。」「はーい、わかりました。」とは言うものの、「しかしどこがどう違ったっけ」みたいな。

昔やったら講義は一年単位なんですよ。今年はこれ読みます。ほんでこうこうです。二、三行ですわ。それが一年だけで終わるか言うたら二年目三年目四年目五年目六年目七年目言うてる間に三〇年続いたり。シラバスなんか手かからへん。ちょちょちょと書いたらしまいですやん。シラバス書く時間を研究に当てたらちよつとマシच्याうのつて。すいません。愚痴が出ました。今も「来年のシラバスかいてください。」「はいわかりました。」珍しく締め切りに間に合いました。ほしたら「すいません、通信では来年からこうこうで、ここことが違いますねん。そやから二五日までに訂正しといてくださいね。」「はーい」いうてたら、あつという間に「今日何日や、二六日。どないしよう」というような状態でございます。話を元に戻しますと、せっかく輪読会で読んだ成果が形になるような、そういう体制にもっていかなあかんのやけど、中々難しいなというところでございますので、御当局の皆さん方、宜しくお願い申し上げます。ただし、御当局もそんな言われたかて、いまさらシラバス簡単にするみたいなことできませんわ。第一に「学生のため」という大前提がある（しかし学生がちゃんとシラバス読んで常時頭に入れてるか疑問です）し、グローバルな外圧もあるから、今日や明日どうこうできるもんちゃうとおもいます。それはわかるんですけど、一方ではどうにかならんかなということでございます。

⑬ 浄土学事始め その三 — 『和語燈録』の講座担当—

『醍醐本法然上人伝記』の次ですね。佛教大学の四条センター（現O.I.C.）において、かつて、故岸一英先生

コーディネートのもと、『和語燈録』市民向け講座が行われました。『和語燈録』というのは、法然上人が、漢文でなくて日本語で残された法語（教えの言葉）を集めた資料です。複数の先生方が講義を担当なさって、現代語訳の成果が積み上っております。岸先生のご遺志にお応えして、これを何とかまとめんとあかんということで、ずいぶん前に藤堂俊英先生（佛敎大学名誉教授）からご担当の先生方に呼びかけて頂いておりましたが、先ほど紹介していただきました佛敎大学法然佛敎教学研究センターでこの企画を側面から（おこがましいことながら）サポートさせて頂いて本文とともに訳注を出そうではないかということになっております。講座開設当時ですね、岸一英先生が、どう仰ったかというところ、「ここからここまでというふうに担当を決めるから、その通りやってほしい」と、「やるにあたっては自由にやってもらったらいいけれど、一つだけお願いしたい。必ず現代語訳を準備してほしい」と、当初から現代語訳が積み上っているわけです。でも部分ごとに別々の先生が担当されたので訳語の統一もできてないということ、今ちょっとずつセンターの方で読み直して、ご担当の先生方に「こう変えますけどこれでいいですか」のようにやりとりしてありますが、中々思うにまかせないという状態であります。ということでもこれも先程の話で、せっかく積み上っているのに形にならん。しかも資料を読んでいって訳文を積み上げていくということ、本出すということは全く別のことですからね。一からやり直します。読んでる間は自分らさえわかったらええで、やっていけないことはないです。けど人に読んでもらおうと思うたら、分かる日本語にしないと、「なんやねんこの訳」みたいなことになって、せっかく出してもなんのことかわかんような訳になりかねないですよ。訳する方は読者がちゃんとこれでわかってくれるかどうかいうことについて最大限の配慮をしながら文章を作らないといけないので、今までの自分らだけわかったらええわでやってるのでは、二倍三倍ぐらいの労力をもういっぺん積みまなあかんということ。さらに印刷社へ回しますね。回したら校正帰って来るでしょ。校正してたら、また景色、見え方がち

がって、「我ながらなんちゅう訳してあんねん」みたいなになって、また何遍もやり直さなあかんのね。そやから周囲の皆さんは「せっかく積み上がってんねんからなんとかせえや」って仰るかもわからんけど、自分自身に対してもそう言いたいねんけど、ただね、訳ができて言うても、人に読んでもらうようにするのは、大変ですわ。大変です。それといっぺん出してしまたら末代残りますもんね。ほんで自分らの中で「何かおかしところがあったらまた訂正したらええわ」と思うて「はいはい間違いがあっても、次に直します」って思うても、絶対その機会は来ません。いや来ることもあるし、来たら有難いけどね。滅多に来ません。いっぺん出してしまたら。それが証拠に、私が昔、ある先生の訳本の書評をしたんですわ。とても立派な訳本です。何十年もの蓄積の結果やから「同じことをお前やってみ」と言われてもできません。しかし訂正が必要な箇所もたまにあります。そこで「とても立派な業績です。ただここはこうこうちゃいますか」いうて書いたら、その先生が丁寧にお手紙を下さいました。「高く評価していただいて有難うございます。問題点については、次に出す時に訂正します」いうて。ところがそのまま亡くなってしまった。そういうもんですわ。ですから、一発勝負でほんまは決めなあかんです。でもどっかでね、どっかで「後で直せるかもわからん」っていう気があるもんやから。まあお互いしようがないかなとも思いますが。

ということ、第一部の(3)あたりまで来て(4)ですか、このあたりに暗い時代があり、サンスクリット初級からインド文献学へ。なんじゃこりゃ。一九七二年、何を書こうとしたか、というより何を話そうとしたか忘れてしまいました。他にちよつと、言い残しとかあるかと思えますけれども、第一部についてはこれぐらいですかね。がここで質問とか受けられたらいいんですけど、收拾がつかんようになるからやめときましょか。そしたらね、次です。第二部です。



第二部 浄土学分野の訳本や論文等

① 『傍訳選択本願念仏集』

浄土学分野の訳本・論文等であります。どんなことをやったかという（自慢）話になるわけですけども。先程、曾和先生からご紹介頂きましたように、高橋弘次台下のご指導のもと、善裕昭先生と私とで『傍訳選択本願念仏集』（四季社、二〇〇二年）いうのを出しました。「傍訳」とあるように、法然の主著である『選択集』の訓み下しの傍らに現代語訳を付けたものです。これはね、岸一英先生が、「ようやった」いうてくれました。岸一英先生が。岸一英先生は人をあんまり褒めない人なんです。厳しいんですよ。せやけど「これはようやった」いうてくれはりました。しかしふつうそれを自分で言うか？（笑）。それにしても岸先生、生きててくれてはったらなあ。もったないことしましたね。

② 桑門秀我 『選擇本願念仏集講義』 訳注

次へ行きましょか。桑門秀我 『選擇本願念仏集講義』（前・後篇）現代語訳注であります。そもその話から致しますと、主役が今の伊藤真宏学長なんです。昔、伊藤学長のお寺のHPに「任職を交えみんなで語り合おう」という掲示板がありました。語り合った方はたくさんありましたが、一ページの(2)あたりに挙げた方々のうちでは、上野忠昭先生と伊藤学長、他に皆さんあまりご存じではないかもしれませんが、井上智之さん——佛教大学の大学院まで研究に励まれたあと浄土宗の若手僧侶育成のために様々な企画を考え出して実行に移された方ですが、残念



なことに若くして亡くなってしまいました——という方とか、私もですね。その時から遡って、ちょうど先程申しました『傍訳選択本願念仏集』を出す時に、解釈が難しい箇所ありますね。いくつかすでに現代語訳（服部英淳訳、石上善應訳等）があつて——ようやくやっていただいたなと思うんですけれども——自分らりの訳を作るとしたら、（石井教道『選択集全講』平楽寺書店以外に）信頼できる伝統的注釈みたいなのがあるといいなと思っていましたところ、たまたま古書店で、桑門秀我という浄土宗の宗学者が数え三十五歳の時（明治二八年）に出された講義に巡り会いました。上、中、下本、下末と四冊あり、木版本で五〇〇頁ほどになります。私（たち）の現代語訳にはこの講義を参考にしたところが多いんです。

この講義の内容は、『選択集』の部分ごとに、（一）目次に当る「科文」と、（二）漢文に返り点と送り仮名の付いた部分、（三）それに対する講義、以上の繰り返しになります。

さてまた話は掲示板に戻りまして、私はその掲示板に集った方々に呼びかけたんです。『選擇本願念仏集講義』といういい資料があるので、皆でデータ入力しませんかと。そしたらボランティアして下さる方が何人も現れて、瞬く間に入力が終わったんです。データは、以下のような内容になりました。

（一）科文、（二）漢文、（三）漢文訓み下し、（四）傍訳データ、（五）講義

これの繰り返しです。これらのうち（一）科文と（三）漢文訓み下しと（五）講義とは新たな入力、（二）漢文は、大正新脩大藏経のデータ（SAT）を訂正したもの、（四）傍訳は、善裕昭先生と私が手元に置いていたもの（校正前）。このデータを上野先生がWILDに保存してくださいました。

私は、せっかくの資料なので講義を現代語訳しようと思つて少しずつやりだしますと面白くなって、——「他に優先するべき仕事をちゃんとせんかい」やねんけど——かなり分量がたまつたんですよ。それ以降、「大学院の浄

土学の授業ではこれをやったらええわ」いうことでやったりしました。さらには手間がかかるけど、法然仏教学研究センターで出したらどうかということ、周囲の皆さん方にお世話になって、前・後篇の二冊本としての出版を計画して現在に至っています。実は「今週の金曜日までに、最後の校正を出しなさい」って言われてるんですけど、諸般の事情で手も足も出ない状況でございますので、上野忠昭先生や若手の皆さんに仕事の大半をご負担頂いている状況です。二冊のうち前篇は二年前に出まして、後篇を今年に出すべしで、いま最後の詰めに差し掛かっています。

③ 良忠 『往生要集義記』

次は、浄土宗三祖良忠の注釈書、『往生要集義記』であります。これに関する話は最初に申しましたように附属図書館報『常照』第六五号（二〇一八年）に載せたことがあるんです（配布資料（2）「佛教大学附属図書館の浄土教関連資料―先人の負託に応える」）。父親が亡くなったのが平成十五年で、そのため先程曾和先生の方から仰っていたように、神戸女子大と寺の仕事の両立は無理（勤務だけならやれないことはないですが、研究と本の出版が出来ません）となって平成十六年の三月を以て神戸女子大をやめたんですよ。それで遊んどったわけですよ。遊んどったいうても、『俱舎論』関係の共訳本を何冊か出さんとあかんということで辞めた面もあったんですよ。ちょうどその時ね、非常勤もやってなかったと思うんですけども、佛教大学の梶山雄一先生（京都大学名誉教授）がその三月の二九日に亡くなったんですよ。もうすぐ新年度開始というときに梶山先生ご担当予定の授業に大穴が空きました。それで「えらいこっちゃ」ってなったみたいで、——当時のこと曾和先生ご存知ですか。いやご存じない？ あ、そうですね。——「大学院の授業担当どないしたらええねん」ってなって、当時、辛嶋静志先

生が遠路はるばる創価大学から集中講義か何かで来てくれてはったんで、「辛嶋先生に頼もうか」となったらしいんです。でもね、一年間毎週みたいなのはさすがに気の毒なんで、半年だけお願いして、「あとの半分、誰かおらへんか」となって、私にお鉢が回って来たらいいんです。

そのときに私が教材として何を考えたかです。いまの話題はこの『往生要集』の注釈書『義記』ですけども、『往生要集』いうのは、もともと浄土学のもんでしょ。それから仏教学のもんでしょ。それから地獄とか餓鬼とかいうて仏教文化的なものもあるでしょ。大学院の仏教関係は、仏教学・浄土学・仏教文化の三本柱で、その三本の全部に当てはまるというわけで、私としては、わんさか受講生が来てくれるやろうと思うて、これを読もうとなつたんですよ。ただし全部で八冊あるうちの第一冊に収まる地獄については大体現代語訳の目途がついていたので、「餓鬼道」のところを選んだんですよ。ほしたらね、蓋開けてみたら、正式に登録してくれはったんは、オンリーワン。一人だけ。しかもね『常照』には間違い書きまして、浄土学の人やと思うてたら、仏教学の人一人だけやつたんですよ（あとでご本人に訂正されました）。ほんで空気抜けまして——。せっかく気合入れて『往生要集義記』読むぞ、って思うてたら、この結果に「ハァー」ってなったわけですよ。ところがね、この人も含めて周りにはすごい人がいやはりまして、（会場を撫でまわしながら）「ここらにもいやはるんですけども（注・南宏信先生のこと）、色んな版本とか手書きの写本とかの情報を集めて、「先生こんな本を東京へ探しに行きますんで」という日が必要その授業の日なんです。内心では「ほんまにもう、さぼるのか」と思ってたんですけども、それがまあ、すごい本を集めてきやはるんですよ。その正式受講生の名は、大川内優君、今は畔柳優世（くろやなぎ・ゆうせ）さん。——忘れんうちに言いますわ。この人ね、お説教のナンバーワン決めるイベントがあるんですけど？ お笑いやったらMIとかあるやないですか。その候補者（登壇者）にならはったみたいです。（注・最終講義当日、

「優勝者」と申ししたのは誤りでした。ご関係の皆様にお詫びいたします。詳しくは「H1法話グランプリ2021」で検索してください。——この方が友人の稲田廣演さんらと尊経閣文庫（加賀藩の前田家の伝える貴重書、文化財等を収めた文庫）へ行ってみたり、それから佛敎大学でまだカードにしかなくてない写本をカードを繰って見たところが中世写本であったとか、そういったのが続々と出てきました。

それでね、授業で読んでるうちに、あるとき彼が「先生、読みが浄土宗全書本と違います。」とかいいますよ。私は、「ちょっとくらいは違うやろ。大したことないやろう」といってたんですよ。なんでかいうとね、大正大学の太谷旭雄先生がご論文で、「色々版本みただけでも、大体基本的には同じで、大して変わらない」といって仰って、その論文を読んでもんやから、彼の手元の資料を見せずに、「変らへん、変らへん」というたら、どっこい実際変ったんですよ。それで「大発見や」といってたら、もうすでに他の先生が言われてたことらしいんですが、良忠さんの原本に、より近い系統の本を彼らが発見してたということなんです。ただし、この(3)のリストにあるものは、基本的に『浄土宗全書』所収の本から直接現代語訳したり訓読したりしたものであります。

#### ④ 法然における諸行往生の可否

最後ですけども、そもそも法然上人が「極樂往生のためには、三種の心（三心）を具えて南無阿彌陀仏と念仏を唱えてください、そしたら必ず一〇〇%、極樂往生できます」といって仰っていることは誰しも知ってるわけですけど、それ以外の修行（これを、念仏以外の行ということで「諸行」とか「余行」とか言います）で極樂往生できると法然上人は考えておられたか、これが長らく懸案になっている、または、なっていたわけですよ。実は諸行による往生が可能か不可能かで、流派が分かれてさえいるんです。

それについては、日本史学の平雅行先生が、修士論文をお書きになったお若い時以来、完全否定する趣旨のご論文を発表され、佛教学元教員の安達俊英先生がそれに追隨する形で論文を二本発表しておられるんです。この佛教学もその伝統の中にあるところの鎮西流の浄土宗では、「念仏以外の修行でも極楽往生は不可能ではない」とする立場なので、私は「本当にそれでいいのかな」と考えながらもちゃんと調べてなかったんで「どうともこうともわからんな」と思うてたんですけど、やっぱりちよつとずつ虚心に資料を読んでいくと、法然上人は確かに「極楽往生のための念仏や」って仰ってるし、「他の修行はやめとけ」とまでいうてはることもあるので、可能性は非常に低いと思うし、否定的な表現も多々あるけど、完全に否定してられるかいうことについては、「ちよつと待った」やろう、と思うようになって、読んでいけば読んでいくほど、完全否定は無理、否定はしてはるけど、完全否定は無理という立場に立ちまして、というか書いてるうちにそういう結論になったんです。

それで九個ぐらいの論文書いたんですよ、なんで自分みたいなのがこんな論文かなあかんねんって思いながらも。何でそんなこと言うかというのと、まだその二〇一一年なんか、私、浄土学の教員やなかったと思うんですね。浄土学の教員でもない者がなんで書かなあかんねんて、すみませんこんな言い方して。今の撤回したいんですけど。言うてしまたんで重ねてまた愚痴言いますわ。浄土宗のある方が批判しはったんです。批判されるんならその方は批判論文書かはるんかいいうたら、書かはらへん。批判するなら、「おかしい」たらいうんやったら、論文書けよと。ある意味浄土宗の存立が懸かっているんやから。ところが誰も書かはらへん。ほんなら、気づいたもんが書かなしやあないやん、てなつて、書いたの。あかん、また敵作つた(笑)。また別のある先生はね、「教学上の問題としては、念仏以外の修行で極楽往生できるかできないか、これは大事かと思うけれども、実際の信仰の場面においては、大した問題やないやろう」って言わはる。「ちよつと待つてよ。皆さんが論文書かはらへんからこちらが書く破目



になったのに、後ろから味方の頭に石投げる人がありますか。それに教学と信仰をばらばらにする仏教なんかありますか」って思いましたわ。で、お時間ですが、お蔭さまでこういう論文を書くことができ、晴れて佛敎大学の浄土学の教員にならしていただいて、現在を迎えることになったということでもあります。十二年間どうもありがとうございます。

#### 付記

本稿は、令和四年一月二十六日午後零時五〇分より二時二〇分まで、佛敎大学礼拝堂において催された本庄の最終講義の文字起しを、かなり書き換えたものです。書き換えに当っては、情報を付加し、繋がらない話し言葉を整えました。必ずしも時系列に依らない複数の資料をベースにした配布資料に基づいたため、読みづらい点があることを申し訳なく存じます。